
転生したら鍊金術師

薔姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生したら鍊金術師

【NNコード】

N6840X

【作者名】

薔姫

【あらすじ】

高校生の男だった俺は、ある日とつぜん神様のミスで死にました宣言されることに。おわびに異世界で特殊能力付きで転生させてもらひ。まあこれはこれでいいかと言うことで、魔法の世界なのに魔法の一切使えない主人公が、その世界にはない鍊金術師としてほぼの過ごしていく。あつ、一話あたり、2000字～3000字ぐらいと短いです。

プロローグ（前書き）

異世界転生ものは初めてなのでグダグダになるかもですが、『』ア承
ください。

プロローグ

「あなたは死にました」

俺の目の前で小学生ぐらいの女の子が、無駄に大人ぶった態度で話している。

「はい？ 今まで、状況が全くつかめないんだけど？」
「いつたいこの人は何を言い出すんだろうか。

俺は実際に今生きてるし。

「もう一度言います。あなたは死にました」
「またもや何か言い出した。これはもうあれに違いない。
「……あー、宗教の勧誘なら結構です。俺、神様とか信じてないんで」

「あなたの目の前にいる神様の存在を全否定ですか？」
「もう喋るのがめんどうになってきた。
ん？ 今何かさらりと変なこと言わなかつたか？」

「だ・か・ら、私が神様であなたは死んだんです」
「これはもしかしたら、あの病気かもしれない。」

「小学生なのに厨二病ですか？ 大変ですね」

「厨二病じゃないですよ。詳しく説明すると、あなたは私のミスで死んでしまいました。生き返らせるのは神様の規則的に無理なんで、

前世の記憶と少しチートな設定を持つて転生させてあげよう。って言つてるんですよ
むきになつて子供が怒り出した。スルーしたいが、無視するとめんどうだうだな。

「何となく分かった。でも、その詳しい説明を早く言つてくれないと分からんだけだ」

「言わなくてもそれぐらい察してほしいんですけどね
子供のくせに。と思ったがまた絡みがめんどくなるのも嫌なので言わないでおじつ。

「うん、俺が悪かったよ

「えつ？」

さつきまでと俺の態度が違うから、なんかあわてだした。よし、このまま押し切れば……。

「それにして、神様つて凄いですね。間違えて死なせたから転生させてあげる。って言わなきゃ分からぬのに。さすがは神様、心の広いお方だ」

なんだか、褒められるのも満更でもないって様子で言葉を紡ぎだす。
「その優しさは胸に刺さるからやめてほしいんですけど……」

とにかく。とそこから続けて

「異世界になら転生させることができます。希望があれば規則の範囲であれば叶えてあげます」

「そんなこと急に言われてもなあ……」

腕を組んで考えるポーズを取りながら、最近読んだ漫画から考えをひっぱりだす。

「じゃあ、魔法とかある世界にしてくれ。それで、俺は錬金術師としての能力と知識が欲しい。錬金術師なんだから科学や医療の知識についても。できる?」

我ながら、これはいかにも主人公最強とかになるんじゃね?って設定だと思つ。

なぜ最強の魔法使いにしなかつたのかと言つと、魔法の世界で魔法使って普通じやん?ならいつそ他とは少し違つ存在の方がかつこいいじやん。

「その程度なら出来ます。なら転生させます。いいですか?」

俺が小さく頷くと田の前が真っ白になる。

「おぎやあ、おぎやあ、おぎやあ、

真っ白になつたと思つたら、その先は生まれた直後でした……。つてマジか?

普通にうゆうのつて3歳とから5歳で前世の記憶が戻るんじや……つて言つよりもマジか?

マジでここからスタートとか、出鼻くじかれるわあ……。

まあいつか。

とりあえず、ある程度までは普通の赤ちゃんを演じて、そこからは少し天才な子供程度でいいだろつ。

そこで、男の人が二人で話している。

「残念ですが、お子さんの魔法適性はFで魔法の才能はありません。一人の男が、もう一人の男に話している。

魔法適性とは、つまり魔法の才能だろつ。

俺には一応は錬金術師の才能があるから、魔法適性は欲しいけど無

くても困らないだろ。」

「……そうですか。でも、この子は僕たちの子供だ。魔法の適性なんてなくても立派に育ててみせます」
おそらく今話したのが父親だろ。金髪の無駄に美形のイケメンだ。イケメンとリア充は爆発しろ！

「そうですね。……では私はこれで」

父親と話していた男が出て行く。それと同時に父親が俺を抱きかかえ、やきほじまでは異なる親バカ全快の表情をしてくる。

とりあえず、これから田標は……

5歳までは普通の子供を演じよ。

今の父親の表情を見るかぎりでは、少し変なところがあつても『ウチの子は天才だ』とか言つて流してくれるに違ひない。うん、そう信じよ。

子供の体だから泣きつかれたのか、急に眠くなつてきた。

精神的には前世の年齢（つまり15歳）なのだが、体の年齢は0歳なので、体の方にしたがつて眠るよ。

第一の人生が幸せなものありますよ。

プロローグ（後書き）

誤字、脱字、質問があれば感想欄でお願いします。
読んだら感想と評価欲しいです。
あとできればお気に入り登録も！

1話 初挑戦（前書き）

どう書けばいいのか全く分からなのでグダグダになりましたが、
読んでくれると嬉しいです。

「ルイス様起きてください、お食事の時間です」

「分かりました。着替えたら行くと父様にお伝えください」

「かしこまりました」

そう言つと、この家で住み込みで働いているメイドのアリスさんは出ていった。

よし、話す相手はいないが今の現状を説明しよう。

僕の名前はルイス・アルクイン、5歳です。親バカな両親と使用人數人でアルクイン家の屋敷に住んでいる男の子です。

ちなみにこの世界には魔法がありますが、鍊金術師としての才能を神様に貰つ代わりに、魔法は一切使えなくなつてゐみたいのです。魔法適正はFランクですから。ちょっと魔法も使ってみたいなどか思つてゐることは内緒です。

「おはよう」やります。父様、母様

「おはようルイス」「おはよう、ルイスちゃん」

先に挨拶してきたのが父様のアレン・アルクイン

この地域の領主様で、門から屋敷まで馬車で行かないとしんどいぐらいの屋敷に住んでいる。

まあ僕も住んでるけど。

次にルイスちゃんと呼んできたのが母様のショリー・アルクインいつも僕を『ちゃん』付けで呼んできては抱きついてくる親バカです。

ちなみに父様はその光景を羨ましそうに見ていました。

「突然ですが父様、僕ももう5歳です。遠くまでは行かないで屋敷の裏にある庭で一人で遊んでもいいですか?」

僕の質問に父様は少し考えながらじつじつを見ている。よし、ここはあれしかないだろう。

上目遣いで父様をちらちら見てみる。

「はっ」と小さく声をあげた父様は決心がついたのか、僕に何かを言ひ出す。

「特に危なくないだるうから、いいぞ。でも、川や池には近づかないようにな」

「分かりました」

満面の笑みでかえしてあげると、父様はどこか満足したのか気持ち悪いぐらいの微笑みが顔に残っている。

「ルイスちゃん、お日様がちょいと真上に来る前に帰つてくれるんですよ?」

「分かりました」

こちらにも満面の笑みでかえしてあげると、母様もどこか満足した表情を浮かべている。

フツ、ちゅるすぎる。

こつちは5年間も無垢な少年を演じてきたんだ。演技だけなら今ならハリウッド映画にも出れそうな気がする。髪も金髪だし。

「やつぱり心配、ルイスちゃん、私もついて行くわ」
朝食の後に外に出ようとしたら母様が言つてくる。
だが、この程度は予想の範疇なのだ。

「ついてきたら母様のこと嫌いになりますよ？」

悲しそうな表情で言つてみると、母様は心の中で葛藤があるのでうと思わせるほど悩み、何かを決断したのか僕の方を見てくる。

「私はルイスちゃんが帰つてきた時にお腹空かせるだらうから、ご飯の用意をしておくわ」

親バカな母様にとつては息子に嫌われる事態は避けたいようだつた。

「では、行つてきます」

玄関で頭をぺ「ん」と下げながら言つて、母様は僕が見えなくなるまで手を振つてきた。

いやいや母様よ、一生の別れじゃないんだから。

母様と別れたあとは、10分ほど歩き畠敷の側にある草原までくる。

そして5年間我慢し続けた鍊金術を試してみよつと想ひます。転生した時の知識で、鍊金術については知識として頭の中にずっと入つてゐる。

鍊金術のルールについても入つていて、

- ・質量保存の法則の上に成り立つてゐるため、密室の中ではその空間内にある元素でしか練成できない。

つまり、ある密室空間内に炭素が50 gしかなかつたら、炭素50 gでできる物しかできないのだ。

だが、例外として密室でない場合だと異なる。

50 gの炭素の固まり

- ・物質を構成している元素が分からないと練成できない。

大きなルールはこんな感じになつていて。小さなルールに関しては
……省略してもいいので以下省略。

そして、構成物質を知るために、鍊金術以外にも神様からチートな
能力を貰つていて。

それは、目で見たものの情報を知りたいと思つと、頭の中にもとも
と知つていたかのように知識として入つてくるのだ。

地面を見れば、土の構成元素が何%の割合で含まれてゐるのかまで分
かる。

大気を見ても同じだ。

そして、田で見て土の構成成分を見る。

掌を合わせてから、地面に両手を置き、土を何に変えたいのか明確
なイメージをする。

両手を中心に練成陣が広がり、一瞬光ると田の前に小さな土のゴー
レムが出てきた。

「やつた、成功だ」

思わず騒ぎ出してしまう。

そして僕と同じようにゴーレムを踊つていて。
どうやら僕と感情がリンクしているらしい。

「戻れ」

心で唱えて口にも出してみると、さつさまで踊つていたゴーレムが
土に戻りその場に崩れ落ちる。

それからも土でいろいろ作つてみて、新たな願望が生まれてきた。
水は氷になるのか?と詰つ疑問だ。

大気中の水蒸気でやればいいんじゃね?って思いやってみる。

練成の過程で周りに集まつた水蒸気が周りに熱を放ち、周囲の温度が一瞬だけ上がる。

そして目の前にはイメージしたとおりの氷のブロックができた。

そこから「やりたい」と出でてくる。

空を飛んでみたい。

魔法使いを選んでいたらできたのかもしけないが、鍊金術師は空を飛ぶことができるのか?と考える。

しばらくボーッとしながら考えていると、一つの結論に辿りつく。

「今は保留」

将来の自分考えて。

他人任せではないが、他人任せなかんじがする。

まあそんなことはいい。

そして転生ものと言つたら定番のアレがいないことにはづく。

「使い魔的な靈獸欲しい」

呟きながら、また思つ。

魔法使いじゃないのに使い魔つて違うなあと考えていると太陽が既に真上まで来ていた。

「早く帰らないと母様が心配してしまつ

時間はいっぱいあるから、これから考えればいいか。と言つ、さつきまでの脳内で繰り広げられた議論は無駄になつた。

僕が帰つたら母様が『心配だつたわ』と泣きながら言つて抱きついてきたのは、言わなくても分かるだらう。

1話 初挑戦（後書き）

誤字・脱字があれば感想にお願いします。
評価と感想書いてくれると嬉しいです。
あとお気に入り登録もお願いします。

2話 新しい家族は靈獸さん（前書き）

2話目に入り、早くも文章を書く才能がないと思われるを得ないですね。

グダグダに更新しますが、よろしくお願いします。

「母様、今日も裏にある森へ行つてきます」

「分かつたわ。ルイスちゃんは川や池には近づいてないだろ？からいいわよ」

初めて行つてから今日で5日目になつたのだから、母様の対応も慣れたもんだ。

「では、行つてきます」

頭を下げて言うと、「早く帰つてきてね」と言いながら、見えなくなるまで手を振り続けている。

ここは変わつていないらしい。

こつこつこつこつが母様とは言え可愛くみえるのは秘密だ。

ちなみに母様は23歳で父様も23歳なので、精神年齢的には3歳しか変わらない。

なんでも母様の家と父様の家は貴族で、一人が生まれる前から家通しの付き合いがあつたらしい。

そのせいで昔から一緒に遊ぶことが多く貴族では珍しい相思相愛で結婚したらしい。

両親は親バカだがそれだけ夫婦仲もいいので、妹か弟ができる日も遠くはないだろう。

その時は精一杯可愛がると決めている。

そんなことを考えていると、いつもの草原についた。

草原と言つても学校の教室1つ分ぐらいのスペースが森の中に空いているだけの空間と言つ認識もできる。

だが、いつもと違うことに今日はすでに先客がいた。

小さな子犬のような生物が丸まつて自分の足をなめている。見るどひどい怪我をしている。おそらくは他の動物にでも襲われたのだろう。

「怪我してるみたいだけど大丈夫?」

動物には理解できないだろうが話しかけてしまつと言つのは、皆一度は体験したことがあるだろう。まさに今がそれだ。

『来るな』

誰かが話す声が聞こえる。だが、周りには誰もいないし。聞こえ方も少し変だ。

「誰?」

そつ咳きながら辺りを見渡すが誰もいない。いるのは田の前の子犬だけだ。

「せしかして君?」

そう言つて子犬を見つめが警戒しているのか何も答えずに犬歯をむき出しにしている。

「僕は敵じゃないよ。怪我してるみたいだから心配しているんだ」そう言つながら近づいていくと、子犬は少し後ずさりながらも、犬歯むき出しで威嚇してくる。

『こんな傷は1時間もすれば治る。汝に心配される筋合^{うね}いはない』確かに聞こえた。でも、子犬は威嚇したままで全く口を動かしていない。

だが、一応は『//ゴーケーションはとれるみたいだ。

「僕は医学の知識があるんだ。怪我してゐるのに放つておけないよ。素直な気持ちをのべる。

『たしかに貴様の心から悪意は感じ取れない。それに汝は我と同じよつなるのを感じる』

「僕はそんなの全く感じないけどね」

そう言つと子犬を足元まできて、こちらを見上げてきていた。

「とりあえず僕が治療してもいい?」

『汝にまかせる』

そう言つと子犬は怪我してゐる足をこちらに向けて寝転がる。どうやら治療しかつていいらしい。

「じゃあ、やるね」

そつと見て、手で見て構造を確認する。

地面などではなく生物なので、DNA単位で見て塩基配列を知識として頭に入れ、そこからアミノ酸配列を確認し、タンパク質の立体構造なども確認し、治療を終えた後の明確なイメージが頭の中に完成する。

イメージを固めるのにおよそ2秒。地面よりは遅いが、それも仕方ないだろつ。

そして、掌を合わせて右手だけを怪我してゐる場所にあてる。手を中心に練成陣が広がり空氣中と地面から必要な元素が集められ、復元される。

それも一瞬光つた間に行なわれ、次の瞬間には傷が塞がつてゐる。

「よし、生物でも成功した」

成功の喜びが口から出たが、子犬は目をきょとんとさせて、こちらを見ている。

『これが魔法なのか?』

魔法が見たことないのか、そんなことを聞いてくる。

「違うよ。これは鍊金術と言つてね、僕しか使えないから秘密にしててね」

『汝は他の者とは違う。だから、汝が我と同じようなかんじがしたのか』

何か一人で納得してゐみたいだが、全くついていけない。

「じゃあ、君も僕と同じで特別なの?」

子犬は少し考えこんだあとに、また話しかけてくる。

『我に親はいない。この世界によつて生み出されたものだ。汝達は我らのような生物を総称として、靈獸と呼ぶらしいがな』

靈獸と言われても全くピンと来ない。

「総称つてことは他の種類もいるんでしょう?君はその中の何て生物なの?」

純粹な好奇心からの疑問だった。

『靈獸と言つらしに。2日前に生み出されたのだが、生まれた時からある程度の知識が頭の中にある。それによればそう言つ名前らしい』

い』

「ふーん、ねえ、帰るところがないなら僕の家に住まない?」

『汝は悪人には見えぬし、悪意も感じんからそれもいいかもしけんな』

よく分からぬが、OKされたらしい。やつた、ペツトGETだ。

「そういえば、さつきから汝おのつて呼んでるけど、僕の名前はルイス・アルクイン。ルイスって呼んでよ。そういえば君の名前は？」
これから一緒に暮らすんだから、名前ぐらいは知つておきたい。

『ない。……我は生まれてそれほど経つてないから名前などない。ル、ルイスが決める』

いきなりの無茶ぶりだった。

「毛が白っぽいからシロ？……はなんか変なかんじだし……じゃあ、これから毛が銀色になりそだからギンつてのはどうかな？」
けつこつ自信がある名前だ。

『ギンか、悪くはないな。ルイスが付けてくれた名だ。それでいいギンは少し照れているみたいだつた。

「じゃあ今から屋敷に帰るけど、ギン歩ける？」

そう聞くと、ギンは頭の上に乗つてくる。

生まれてそんなに経つてないからか、それほど重くは感じない。

「そうだ、ずっと疑問だつたんだけど、ギンつて口開けてなにのこ、どうやって喋つてるの？」

頭の上にいるから見えないが、一応は田だけは上を向けて聞いてみる。

『ルイスの頭に直接語りかけてる。そうしないと会話ができないんでな』

その答えに「ふーん」と答へ、それから屋敷の前につくまで無言で過ごしていた。

屋敷の前まで着き、一つのことを思い出す。

「ねえ、屋敷の中では僕以外の人にはあんまり喋りかけないでね？」

「たぶんビックリしちゃうから」

『そのくらい分かっている』

その答えに安心して「ただいま帰りました」と言いながら屋敷のドアを開ける。

母様はギンの小ささと可愛さで飼うことを即許してくれた。

父様は少し気乗りしてなかつたので、親バカなのを利用して、涙目

+上目遣いで頼むと即OKが出た。

その様子にギンが『家では猫かぶつてるのだな』と言つてきたが、両親の前なのと答えるのが面倒だったので無視しておいた。

その日はギンと同じベッドで寝たが、子犬みたいな見た目通りで抱き心地がよく暖かかくて気持ちよかつたのは内緒だ。

そういうえばギンが自分を雷獣だと言つていたが、もしかして雷出せるのかな？

それできたらギンってかなり強いのでは？

と思う、ルイス・アルクイン5歳（精神年齢は20歳）だった。

2話 新しい家族は靈獸さん（後書き）

誤字・脱字があれば感想までお願いします。
評価と感想とお気に入り登録お願いします！

3話 従兄妹のクレアちゃん（前書き）

今回も新キャラとして更にグダリましたが、ご了承ください。

「とうわけで今日はルイスの従兄妹のクレアちやんが来るから仲良くしてやるんだぞ」

朝食の席でいきなり父様が言い出した。

「父様、話の前置きがなかつたので全く理解できないのですが……突然のことにも母様までも驚いている。

「今日からアーサー兄さん達が一週間泊まりにくる。ルイスはクレアちゃんと一緒に遊んでやるんだぞ」

泊まりにくるというのは年に4回ほどあるのだが、いつもいつも当

日は言つておいても僕も母さんも少しビックリするのだ。

「じゃあ、今日の夕食は駄走作らなきやね」

母様の趣味は家事と料理なので、夕食も母様と使用人のアリスさんで用意する。

だから、この家に使用人はアリスさんと庭番のクリフさんだけだ。

「いつも通りでいいや。いつも美味しいし、何回も来てるんだしさ」いつも美味しいと言わせて母様は照れて何も言えないみたいだ。

「ギンもいじわるせずに一緒に遊んであげるんだよ?」

僕の椅子の横で朝食に肉の塊を食べてるギンに話しかけると、こちらを見上げるよつに見てくる。

『分かってる。我が靈獸だとバレるとめんどいからな。適當

に犬っぽく振舞つておく』

生まれてそんなに経つてないのに、ギンは頭がよすがる気がする。これって頑張れば頭に喋りかけなくとも普通に喋れるようになるのでは?と思つたが、ギンが普通に喋りかけてくるとそれはそれで気持ち悪い。うん。

「それで父様、クレアちゃん達のいつ到着されるのですか?」

ギンと喋る時は普通でもいいが、両親と喋る時は無垢な少年っぽく喋らないといけないからめんどくさい。

「電話では毎前に着くと言つていたな」
思い出すように顎に手をあてて答える。

昼前なら朝のうちの裏の山に行つても平氣だらう。

朝食を終え、外に出かけようと玄関まで来たところ突然扉が開く。
「アレン、これからしばらく世話になるな」「お世話になります」
金髪で見た感じは貴禄がある男性は、父様の兄のアーサー伯父様だ。
年齢は父様より2つ上
それに続いて入ってきたのが、銀髪のよく似合つ整つた顔立ちのエマ伯母様。年齢は母様と同じだ。
エマ叔母様のあとに入ってきたのが、クレアちゃん。エマ叔母様と
同じ銀髪の良く似合つ整つた顔立ちで将来は確実に美人になると思
う。

「伯父様、伯母様、こんにちわ」

「こんにちわルイス君、クレアをよろしくね」

伯父様は簡単な挨拶だけして父様のところへ行つてしまい。伯母様にクレアちゃんの世話を頼まれてしまつた。

「じゃあね」と言い残して伯母様はクレアちゃんを残して伯父様の後について父様への挨拶に行ってしまった。

「じゃあクレアちゃん、何して遊ぶ?」

「おままごと」

何の躊躇いもなく即答する。

だが、しかし

「おままごとはいつもやつてるから他のこととして遊ぼう」
クレアちゃんが来た時はいつもおままごとしかしていないのだ。もう飽きたし、精神年齢が二十歳の男性にとつておままごとなんて恥ずかしすぎるやりたくないのだ。

「こつもやつてるつて、クレア以外の女の子ともおままごとやってるの?これつてお母様が言つてた浮気つてやつなかしぃ。浮気はダメですわ?」

伯母様はいつたい自分の娘に何を教えるんだと問いただしたいが、もしかしたら伯父様が浮気してると疑つてるのかもしね。余計なことは言わない方がいいだろう。

「してないよ。クレアちゃん以外におままごとやる人なんていないし。でも来た時はいつもおままごとだから、たまには他のこともいいかなって思つたんだ」

笑顔で言つとクレアちゃんは何かに討ち抜かれたような反応をしながら、真剣な表情を返してくる。

「クレアって呼んで。『ちやん』はつけなくてもいいわ。それに将来はふーふになるんだから、おままごとで練習しといた方がいいって母様が言つてたわ」

そう、クレアちゃんは子供でよくある『私、お嫁さんになる』宣言を僕にしてきたのだ。それをされたのが4歳の時と早すぎる気はするが、クレアちゃんの両親も何故か賛成しているらしい。

そこは『うちの娘は嫁にはやらん』ぐらいのことを言つてくれた方がよかつた。

それに、いくら体が5歳とは言え、精神的には二十歳なのだ、こんなの……どう考へても犯罪の匂いしかしない。それに断じて口々こんながじやない。

「じゃあクレア、従兄妹どおしで結婚なんて無理だよ?」

「お母様は、『そんなこと些細な問題だ』って言つてましたわ」

だから、伯母様は自分の娘になんて教育をしているんだ。

「とうあえず今日は子供らしく外で遊ぼう」この話を続けると娘の教育について真剣に話し合ひ事態になりかねないので、話題の転換を試みる。

「いいですか

そう言つて僕の後ろに立つてくる。やっぱり年相応な子供なんだなと思つてしまふ。

見た目的には同じなのだが……。

着いてみて氣づく。

あつ、クレアちゃんがいるから鍊金術の練習できない。

そして思考する」と10秒。一つの子供らしく遊びを思つづく。

「ギンは走り回つて逃げてね、僕達はギンを捕まえるから。捕まつたら、ギンの夕食は半分没収ね」

普通に頼んでもたぶんやる気を出れないのと、夕食を脅して使うとギンの耳と尻尾がピクッとき、一寸散に逃げていく。

「じゃあクレア。これからギンを捕まえるけど、危ないから離れたらダメだよ？」

「はい」

そう言って、クレアちゃんが僕の手を握つてくれる。どうやら、手を繋げと言つたららしい。

まあそれぐらいいいかと思い。それに答える形で手を繋ぐ。クレアちゃんの顔が少し赤い気がするが、気のせいって思つておこう。

「じゃあ行くよ」

そう言つて一人で一緒に歩きながらギンを探す。

昼食までに何回かギンを見つけたが、すぐに逃げられる。たゞがは靈獸。俊敏さだけでも凄すぎる。

昼食の後もギンを追いかける遊びをして、夕食の後は、僕の部屋でクレアちゃんに転生前の世界での話を聞いてあげると、かなり好評だつたがすぐに眠つてしまつた。

そして、僕、クレアちゃん、ギンの2人と1匹で同じベッドで寝ることになった。

3話 従兄妹のクレアちゃん（後書き）

誤字・脱字は感想まで。
評価、感想、お気に入り登録お願いします。

クレアちゃん達が王都に帰つてから2日後

「父様、僕も町に行つてもいいですか？」

今日は父さまが領主をつとめる村の様子を見に行くと言つていたので、ぜひとも外の世界を見ておきたいものだ。

「そうだな……ルイスもこの地域の領主になるかもしないし、連れて行つてやろう」

今日は親バカな部分に訴えかけなくとも許可されたらしい。なんと珍しい。これは子離れまでそつ遠くないかもしれない。

「そこ」にまたがつて……上手いじゃないか。やつぱり俺の子は天才だ

訂正。やつぱり親バカすぎです。この人の親バカは死ぬまで治りません。

父様が僕のすぐ後ろに腰掛ける。

それと同時に馬が走り出す。

スピードは分からぬが体感的には自転車おそれほど変わらないぐらいいだ。

そのスピードのまま10分もしないうちに村についた。

ん？

馬に乗つてたのつて玄関から門までじゃないですか。

家の敷地内で馬を乗り回すって、どこの貴族さんですか？

まあ、このあたり治めてる領主さんですけど……。

これからは町にも遊びに行つてみよう。

町は街と言つほど人が多くなく、田舎の中にある少し賑わつてゐる所ぐらいの賑わいだ。

家の数は50世帯ぐらいがあるので都会よりの田舎、つまり中途半端な田舎だ。

とりあえず父様はいろいろと見てまわるそつなので、どこかで遊んでるようになるとと言われた。

別に鍊金術があるから大丈夫だが、普通の5歳児なら何があるか分からぬことを自覚してほしい。

服の首元からギンが顔を出す。

『なあルイス、人間が住む町つてのはこんなに大きいのか？』

屋敷しか見たことがないギンが聞いてくるが、この世界での町の大きさが分からぬので、何とも言えない。

「分からぬよ。僕も町に来るのは初めてだからね。でも、王都はもつと広いんじやないかな？」

ギンと話しているが、周りの人にとっては、ただの頭の可笑しい子供に見えるんだろうか。

変な噂がたつと父様も大変だらうと思い、何かギンも言つてきているが無視することにした。

そしたら、少し拓けた空き地のような場所で子供が遊んでいるのを見つける。

そして一人の少年が声をかけてくる。

「見ない顔だけど誰だ？それに女のくせに男みたいな格好してゐて変じやねえか？」

某猫型ロボットのアニメに出てくる、イジメっ子みたいな奴が声をかけてくる。

それより、こいつ凄い勘違いをしてないか？

「はじまして、僕はルイス・アルクイン。あと、僕は男の子だよ」
屋敷の人以外だと口調が変わるとギンが言っているが、ここでギンと話すとせっかく友達ができるそなに台無しになる。まあこんな子供の友達はいるないが、母様が心配しても困るし。

「お、おとこ！？」

その場にいた男の子が2人と女の子が1人が驚いて聞き返してくる。たぶん全員見たかんじだと2歳ぐらいしか変わらないだろう。

「そうだけど、何か変ですか？」

全く理解できない。可愛い男の子だと自分で思つことはあるが、女の子に間違われる程だと思つてなかつた。

「女の子にしか見えないもん」

唯一いた女の子が驚きがまだ表情に残つたまま話す。

茶色の髪に田鼻立ちが整つた顔立ちが台無しだ。だが、この子は可愛くなると思う。美人つて言うよりも可愛くなるな。

それより、今発覚した新事実、僕は男の娘でした。

これからも間違えられるようだつたら、けつこう憂鬱になるな。いや、確かに可愛いと言われるのは嬉しいけど、男の子に生まれたんだからカツコイイと言われた方が嬉しいに決まつてゐる。

「で、ここに来たつてことは俺達と遊びに来たのか？」

何の自意識過剰？つて思つたがこんな子供には理解できないだろう。そもそも見た田は僕の方が子供なのだが。

「そう捉えても構わないよ」

「じゃあ、改めて自己紹介からするね。僕はルイス・アルクイン。

ルイスって呼んでよ。それで、『ちばギン』ギンも普段は吠えないのにワソと犬っぽく吠えて血口紹介っぽいかんじを出す。

「俺はエドウイン、エドって呼んでくれ。それでこいつがセシル。そつちの子がイヴだ」

ガキ大将っぽい奴はエドウインって言つりしき。セシルと紹介された子も、僕の方を見て笑顔を向けてくれ、イヴも「よろしく」と言つている。どうやらわりと歓迎されているらしき。

「あつ、せういえば。この村で一番強い人つてどこの住んでるか分かる？」

これは今日の目的の一つだ。

「それなら村の端っこに住んでるダンさんだな。何でも冒険者としてけこう有名だつたらしい。今は村の警備をやつてるから、たぶん村で一番強いはずだ」

俺の質問にエドがすぐに答えてくれる。口調のわりにいい奴みたいだ。

「じめん、ちょっとその人に用があるから、今日はもう帰るよ。また2日後にここに来るよ」

そういう残して空き地から出て行く。初対面なのにすぐに帰つてしまい悪印象を与えてしまったかもしれない。と少し不安な気持ちに駆られる。

村の端まで行き、どれがダンさんの家なのか一目で分かった。壁に斧やら剣やらが大量に立てかけてあるのだ。

盗まれる心配をしていないのかと少し不安な気持ちになってしまった。

ドンドン

一応ノックしておく。マナーですから。

「誰だ？」

低い声で家の中から尋ねてくる。

「はじめましてルイス・アルクインです。今日はお願ひがあつて來ました」

そう言つと中から足音が聞こえてくるのでドアの方に向かつて來ているらしい。

出てきたのは、くすんだ金髪に筋肉質な体つき、これだけでも強そうと思うのだが、極めつけは目の横から縦に入っている刀傷だ。

「見ない顔だな。たしかルイス・アルクインと言つたな、アルクイン家の坊ちゃんが俺に何か用か？」

その疑問は正しいが少しバカにしてるような気がしてイラッとする。

「ダンさんがこの村で一番強いと聞いたので頼みがあつて來たのです」

「僕を弟子にしてください。この世界で生きていいくための力が欲しいんです」

真剣な目で目を見て告げる。

「アルクイン家の力があれば一生生きていいくには心配ないはずだ。剣術なんてあつても意味ないぞ？」

たしかにそうだ。アルクイン家の力があれば生きていいく分には全く問題ない。

「親の敷いたレールの上を走るよりも、自分の力で駆け上がつていつた方が楽しいじゃないですか。そのために剣術を学びたいんですね」嘘はついていない。いつかはアルクイン家から独立しようと考えているのだ。

「分かった。でも、条件がある。両親からの許可を貰うこと。あと、何となくだが、お前は他の人間に隠し事をしてゐる気がする。師弟関係になるんだ。それは話してもらひ。まあ無理にとは言わないがな」少し考えてしまつ。転生者だと告白されて信じる人間がいるのだろうか。

「誰にも言わないでもらえますか？」

さつきよりも真剣な目で言つ。

それを察したのかダンさんも真剣な目を向けてくる。

「ああ」

その言葉で意を決して全てのことを告げる。

転生して再び生を受けたこと

この世界とは違う世界に住んでたこと

神様に貰つた能力の鍊金術のこと

ついでに、ギンが靈獸だつてこと

全てを驚きつつも納得してくれたらしい。納得したと言ひよりもそういうものと理解したつて感じらしい。特に鍊金術で実際にゴーレムを出してみたら、かなし驚いていた。

そして人前では使わない方がいいとの注意もつけた。

どうやら5歳のわりに大人びてゐるから怪しいと思って聞いて聞いただけだつたらしい。

ちゅうと悪乗りがすきむんじゅないですかね おじさん。

「今日はもう帰れ。修行は明日から始める。刀は俺が用意しとくから動きやすい格好で来てくれたならそれでいい」
そう言いながら本日初めての笑顔を見せてくれた。
気難しい職人みたいな人かと思っていたが、意外と陽気なおっさんなのがもしかれ。

「はい、明日からお世話になります」

父様との集合場所に行き、帰つてから弟子入りのことを話すと父様は賛成してくれて、
反対するだらうと思つていた母様も「男の子は女の子を守れるくらい強くなりなさい」と言つていたので、意外にも賛成だつたようだ。
そして、明日から始まるであらう修行の前の夜は、ギンを抱き枕に早めに眠ることにした。

4話 師弟関係（後書き）

またまた新キャラです。しばらくはこのメンバーで落ち着くと思いますが、修行の様子とかどう書けば…と思つてるのでまたグダると思いますがご了承ください。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録お願いします。

ダンさんとの修行は子供と同じもあり週に3回、月曜と水曜と金曜だけ行われる。
そして教えられることも基本的なことばかりで、ダンさんの出したくる宿題もつらい。

宿題の内容は素振りが一日1000回だ。

もう少し体が大きければ問題ないが、5歳の体に1000回の素振りはきつすぎる。

初日で筋肉痛になり2日目からは筋肉痛も痛くて、時間がやたらとかかる。
普段は修行が休みの日も当然のよう素振りをするのだが、今日は違う。

母様の出産が近いのだ。

そのことが気がかりで修行どころではなくつてしまつのだ。

そして生まれてくる子供が男の子か女の子かは、医者の先生は魔法を使って知つてゐるのだが、父様が生まれてくるまでの楽しみらく教えてもらわないとにしてゐらし。

「ルイス君こんなところでどうしたの？」

屋敷のベランダでいろいろ考えていた時に声をかけてきたのは、医者であるリア先生だ。

見た感じでは20代後半なかんじだが、実際は30代の後半らしい。女性と言つのは實に恐ろしそう生き物だと思つ。

「母様が心配で外の景色を見て落ち着いていました」
年相応な少年っぽい笑顔で答えるがリア先生の顔は恐ろしいもので
も見るような目をしている。

「アルクイン家の長男は魔法は使えないが天才だ、と言ひひ噂は本当
だったのね」
さきほどとは違ひ驚きの表情だ。

「なんのことでしょうか？」

本気で分からぬので素直に質問してみる。

「私の5歳の時なんて両親でべつたりだったわ。それなのにななた
は自分で考え自分で行動している。そして、普段は子供っぽい表情
で隠しているけど、あなたの中には大きな何かが眠っている」
最後のやつは直感なんだだけね、と最後に付けたし、外の景色を見
る。

「つまり、僕は他の人とは違ひ、異常つてことですか？」

「5歳児がそう考えられる時点で十分異常なんだけどね」
笑つて言い放ち、さつきまでとは違ひ真剣な表情になりさらには続ける。

「そういう一面は隠して生きなさい。他の貴族に知られたりしたら
断りきれない養子の話とかがたくさん来て、あなたの両親が悲しむ
ことになるわ」
心配してくれているのは分かる。
だが、ここまで分かるのは何か秘密があるのでないだろ？

「リア先生が僕の中に何かが眠っていると思ったのは何かの魔法で
すか？」

この時にはすでにする表情じゃないだろう。

そして、先生も子供を見る目ではなく一人の大人と真剣な話をする表情になる。

「私の魔法は治癒系統の魔法も使えるんだけど、発動具がないから使えない。それで生まれつきの魔法は発動具なしでも使えるんだけど、私は意識うると人の潜在能力を見ることができるの」

一呼吸置いてさらに続ける。

「ルイス君に適している魔法はないから魔法は使えない。でも魔力は人並み以上に持っている。そしてルイス君からは私のような生まれつきの魔法が一つあるのと、全く魔法とは異なる異質な力が眠っている。そう見えているわ」

今の説明から分かることは、異質な力と言つのは鍊金術のことだろう。

だが、生まれつきの魔法とは何のことだ？

神様が転生時つけてくれた能力は鍊金術以外にあるとは考えられないから、たまたま生まれた時に先天性の魔法を身につけてしまったのかもしれない。

「その先生みたいに生まれつきの魔法を使える人って多いんですか？」

先生は首を横に振つてから答える。

「こう言う能力は一年に5人ぐらいしか生まれないわね。先天性の魔法はね、消費魔力は少ないし、あらゆる分野に特化したものが多い。私は先見の明ね。攻撃特化の能力の人は国軍の特殊部隊に所属するのが普通ね。」

今ので一応はどんなものか理解した。

つまり、魔法を使えないと思っていたが、実は一つだけなら使えま

すよつてことらしい。

「でも変なのが、魔法を使えない人は魔力を持たない人。魔力が人並み以上なのに適した魔法が全くないって人は聞いたことがないのよ」

どうやら俺はこの辺も規格外らしい。

「でも、先天性の魔法があるんだから何とかなるわよ」
そつ言つて笑つてベランダから出て行こうとする。

その時、いきなりドアが思いつきり開いて、慌てた様子の父様が入ってくる。

「先生、ショリーの出産が始まったみたいですね。すぐに来てください。ルイスも来てくれ。命の誕生をその目で見てほしい」

「分かりました」

リア先生が言いながら小走りにかけて行く。それに続き母様がいる部屋まで行く。

中にはベッドの上で苦しんだ様子の母様がいる。

そしてしばらく慌しい時間が続き、リア先生が母様に声をかける。
「頭が出かかっていますよ。ここからが勝負ですよ」

その言葉を聞いて父様は安心したような表情に変わった。

そして無事に出産は終わる。

生まれてきたのは女の子。女の子が欲しいと父様と母様で言つていたので、父様は嬉しそうな表情をしている。

だが、様子がおかしい。

嬉しそうな父様とは対象的にリア先生の表情は険しい。

その前にはひどい出血の母様がいる。

長時間での出産で限界を超えてしまっていたみたいだ。

生まれながらの医学の意識で分かる。

このままだと死んでしまう。

治癒の魔法が使えれば大丈夫かもしれないが、リア先生は発動具がないから使えないと言っていた。

つまりこの場に治癒魔法を使える人間はいないのだ。

治癒魔法を使える者はいないが、鍊金術を使える人間はいる。

人体に試したことはないが、ギンの治療はできたから人間もできるだろう。

まずは構造を見て、どこが悪いのかを見る。どうやら出血多量らしい。放つておいたら死んでしまうレベルだ。

この世界には輸血と言う概念はないだろう。鍊金術のことを打ち明けるのは、もっと大きくなつてからと決めていたが、思わぬところでその時がきてしまったみたいだ。

覚悟を決める。目の前で悲しそうな表情で、生まれてきた子を抱きながら佇んでいる父様の横を無言で通りすぎる。

父様は一瞬名前を呼ぼうとしたが、5歳の子供とは思えぬほどのオーラを感じさせ黙らせる。

そして助けようと必死に治療しようとしているリア先生の横まで行き、声をかける。

「少し下がつていってくれ……俺がやる

口調が変わっているが、これが転生前の口調。必死になつて思わず地が出てしまつてゐるが、誰も指摘できないほどのオーラのようない雰囲氣がある。

言われたとおりリア先生が下がるのを確認してから、胸の前で掌を合わせ、母様の体に触れる。

掌から母様の体が全て入るぐらい大きい練成陣が広がり、一瞬光つたあとには治つてゐる。

やつたことは単純でDNAの塩基配列から血液を構成している部分を読み取り、その通りに血液の成分を空気中などから必要元素を取り込んで、増血させ、傷口も塞いだのだ。

母様は疲れて眠つてしまつてゐるようだ。

父様とリア先生は俺のしたことが信じられないのか、驚きを隠せない表情をしている。

「あつ、…え、えーっと…」

「ルイス、ショリーが田を覚ましたらちゃんと何をしたのか説明してくれないか?」

「分かりました」

その日のうちには母様は田覚めなかつたので、夜のうちほどうつ説明するか考えながら眠りにつく。

5話 新たな秘密と知られる秘密（後書き）

異世界転生ものと言つたら妹つてことで妹を生まれさせました。

この後の展開ははつきり言つてはとんど考へないのが現状ですね。
いつも書きながら考へてはいるので。

これから展開につきましては、せかるだけ面白く、自然に読める
展開を意識して考へていきたいと思つます。

誤字・脱字・質問は感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録お願いします

母様が目覚め、父様、母様、リア先生、つまり母様の出産の現場にいた全員が集まっている。

昨日母様が出産した女の子、エリンも母様に抱かれ、今は眠っている。

「と言つわけなんです」

僕がどや顔で言つと全員が困惑しているみたいだ。

「いきなりそう言われても分からないぞ、ルイス」
いきなり言い始めたのだ、当然の指摘である。

「チツ」

今の舌打ちが聞こえたのか両親が一瞬驚いた表情を浮かべる。

「力クガクシカジカです、はい」

父様の指摘通りで説明した。アニメや小説の世界では読者はもう既に何があったのか読んでいるから説明はいらないだろう。

「力クガクシカジカでも分からない。ちゃんと話してくれないか？」
せつきからのをふざけた態度と取られたのか、父様が少々怒り気味だ。

ここからはじめて話そつ。

「つまり……僕……いや、俺は20歳です
まずはここから話さなければならぬ」

「は？」

「こいつは何を言つてゐるんだと言つて向けてくる。
だから言つてやりたい。何を言わせるんだ。

「何か?」

そつ尋ねると、母様が代表して聞いてくる。

「ルイスちゃんは私とアレンの子供よ。だつたら20歳じゃなくて
5歳よ」

可哀想な人でも見るような目で見るのはやめて欲しい。

「たしかにこの世界での年齢は5歳ですが、こことは別の世界で過
ごした年数も含めると20歳です」

またしても全員が状況を掴めていないみたいだ。

まあ、それもそうだらう。自分達の5歳の息子がいきなり異世界に
住んでた年数を含めると20歳です。とか言い出したのだ。俺だつ
たら即病院に連れていつてゐるはずだ。

「理解は出来ていなけれど、とりあえず続けて頂戴」
母様に促され続きを話す。

「とりあえずキャラを作るのも疲れるんで、素で話しますね。
まず簡単に言つと、俺はこことは違う世界に15年間住んでいまし
た。そこで不幸にも死んでしまい。この世界に前世の記憶を持った
まま再び生を受けたと言つことです。」

けつこいつ省略した気もするが、大体こんなもんだらう。

「それでショリーに使つた治癒魔法のことなんだが……たしかルイ
スの魔法適性はトランクで魔力はあるのに魔法は使えなかつたはず
なんだが……」

父様が言いたいのは、つまり魔法が使えないはづなのに魔法を使つ

「あー、それは説明するより見てもいい方が早いんでしょう？」

「あー、それは説明するより見てもいいことなんだ？」

そして掌を合わせ、田の前にある木のテーブルに掌を置く。一瞬光つた後に掌には木刀ができている。

その光景が信じられないのか、全員が田を大きく見開いている。そしてずっと黙っていたリア先生が口を開く。

「魔法のようにも見えるが発動具を持っているようにも見えない。それに武器を強化する魔法なら聞いたことがあるが、武器そのものを作り出す魔法など聞いたことがない」

言いながら俺が発動具を持つていないか確認している。

通常発動具は指輪や腕輪、ネックレスなどのアクセサリー類が主だ。これは自分の魔力をいつたん経由させるのに魔法石を用いる。だから魔法を使う魔術師は発動具を持つていないといけないのだ。

「その答えは簡単です。俺は魔法なんて使ってません」

にっこりと年相応な笑顔を浮かべる。

「じゃあ、今のは……」

そこまで言ったところで、俺に返答を求めてきたようだ。

「これは鍊金術と言う技術です。魔法は自分の魔力を持つて何かを生み出す能力。^{ちから}でも、この鍊金術は違います。鍊金術ではその空間にあるものを使うので魔力は必要ありません。その空間にある物を俺が好きなように扱える。

例えば、土から「一」を生み出すこともできるし、空気中の水分から氷を作ることも可能です。もちろんそれと同じやり方で、母様の体も治療しました。」

そう言つと全員理解はできななりにも納得はしているみたいだ。

「その鍊金術？で私を助けてくれたのは分かったけど、その技術は他の人は使えないの？」

母様の言いたいことは分かる。この技術があれば怪我や病気の患者がかなりの割合で少なくなるだろう。

「残念ですがこれは転生時に神様がくれたおまけ能力みたいなものなので、俺以外の人は使えません」

申し訳なさそうに言うと母様とリア先生は少し残念そうな表情をする。

その中で父様だけが少し悩んだような表情をして話し出す。

「ルイスはずっと子供だと思っていたが、十分に大人なんだな。その口調もそつだが、これからは俺達には構わず自分の好きなようにしなさい」

こんな話を信じてもらえないと思つていたが信じてくれたらしい。それどころか、自由に生きてもいいとのこと。そこに悲しそうな表情の母様が声をかけてくる。

「そうね、でもルイスちゃん、私達のことも必要ならいつでも頼つて頂戴ね、家族なんだから」

その言葉が嬉しかったのか、少しムズズツとする。

「母様ありがとうございます。あともう一つ秘密にしてたことがあります……ギンおいで」

そつと後ろに控えていたギンが俺の前まで来る。

「ギン、みんなに挨拶してくれる？」

全員が何を言つているのか分からぬみたいだ。

他の人から見れば犬に喋りかけている少年と、それに分かったと言わんばかりに頷いて答える犬だ。

『ギンだ、これからもよろしく』

素つ氣無い挨拶だが、全員はギンがいきなり頭に直接喋りかけてきて、驚きが隠せないといった表情になっている。

それよりも全員驚きすぎだ。今日だけで寿命が2年ぐらい縮んでいるかもしれない。

「まあ見て分かるとおつでギンは靈獸です。詳しく言つて靈獸です。

」
俺が転生者だと言つことは驚きつつも理解できていないのか中途半端な驚きだったが、ギンが雷獸だと言つと一人の例外もなくかなり驚いている。

「えつ、どうしたんですか？」

俺の質問には父様が答える。

「賢獸はこの世界にたくさんはないが少しはある。でも雷獸と言つたら賢獸の中でも妖怪の中に分類される。妖怪の賢獸の数はかなり少ないんだ。俺も普通の賢獸なら何度も見たことがあるが、妖怪の賢獸と言つと見たことがなかった。げんに一生見れない人間の方が圧倒的に多いんだ」

そう聞くとギンってかなりレアなのでは?と思つてしまつ。

「それにさつきまでの話も含めてだが、ルイスは15歳になつたら王都にある魔法学校に行つた方がいい。魔法学校に行けばその時点で使い魔を持つことを許されるから正式にギンを使い魔にすることだつてできるんだ」

まさかの提案で受けたいのは山々だが、問題が一つある。

「俺は魔法は使えません。魔法学校には入学できないと思つのです

が……」

そう魔法が使えないのに魔法学校に行つてもしょうがないのだ。

「ルイスには鍊金術があるだろつ。念のために発動具も持つていたら、独特の発動方法だなぐらいにしか思われないだろつ」
障害になる大きな理由は改善されそうだが、魔法学校に通えるのは成人してからの15歳からなのだ。

今すぐ決める問題でもない。

「では、父様、魔法学校の入学まではまだ10年あります。それまでに決めると言つことによろしくでしょうか?」

「分かってるよ」

父様もそのつもりだつたらしい。なら、最初からそう言つてくれれば良かつたのだが……。

「では、話すべき」とは話しました

そう言つて席を立とつとすると、父様が、最後に、と言つてひらに何か話してくる。

「その鍊金術のことはルイスが信頼できる人以外に話したらダメだぞ?」

と言つてきた。リア先生にも前に言われた気がするので一応は分かっていたつもりなんだが……。

「分かりました」

とりあえず、それだけ告げて自室に行き、この世界の歴史書を読み、いろいろな側面からこの世界の歴史を知つていくと言つ、今のひそかな趣味の世界に行くのだった。

6話 告白（後書き）

異世界転生ものではお馴染みの家族に秘密を告白ですね。
これまでルイスの口調や地の文が書きにくかったので、これで少しは作者的には楽になります。

誤字・脱字・質問は感想欄までお願いします。
評価・感想・お気に入り登録お願いします

「じゃあ行つてきます」

筋肉痛も起こらないぐらいには筋肉も付いてきた。

ダンさんとの修行がない日は町の人から聞いた家の裏の森の先にある魔の森までギンと行つてゐる。魔の森との境界には大きな川があり、魔物は渡つてこれない。

それに魔の森までは普通なら歩いて1時間はかかる。でも、そこに心配はない。だつて俺……鍊金術師ですから。

裏の森を抜けのには自転車で行く。

何故自転車なのかつて？

そんなの簡単だ。バイクまでは作れた。でも、ガソリンがないから動かなかつたのだ。

父様はバイクに驚いていたが、「これなら少し弄れば自分の魔力で動かすことができる」とか言い出したのだ。あくまでも作ったのは俺。なら、今は技術的に無理だが弄るのも俺がやる。

それにバイクをやめたのには他にも理由がある。身長が……足りないのを……フツ。自分で考へても笑えてくる。どうして作る前に気づかなかつたのか……。

そのような点も含めて自転車で妥協したのだ。

それでも、さすが自転車。歩いて1時間の道のりも自転車だと20分ほどで到着するのだ。

そして大きな川まで到着するといつも通りに鍊金術で川を凍らせ、そのまま自転車で走つて行く。

ちなみに、ギンはずつと走りっぱなしだ。どうやらギンはまだまだスピードが出せるみたいだし、雷獣と言つのは恐れしこよ全く。

魔の森に着き辺りを探索。そして出会った魔物とのエンカウントバトルだ。まるでボモンでもやつてるかの「じく魔物達は襲い掛かってくる。

そう考へていると、また十匹のゴブリンが襲い掛かってきた。

名前は鍊金術使用前の構造を見る目で見たら情報として入ってきたので分かった。

魔物には名前はなく、全てがゴブリンならゴブリンと言つたかんじだ。

そして、全てが全身が緑色で赤い目をこじらひに輝かせながら、筋肉質で斧を持っている。

最近分かったことだが、ゴブリンに知能はほとんど無く、本能のままに生きているらしい。だからこそエンカウントバトルだ。

俺は基本的には鍊金術の実践トレーニングなので剣術は全く使わない。

なので、鍊金術を使う。

掌を合わせ、作りたい物をイメージしながら地面に掌を置く。

一瞬光つた後に、目の前に体長が3mはあるゴーレムが姿を現す。ゴーレムは俺が頭の中で指示した時以外はオートパイロットで目の前の敵を倒しにかかる。

今回も同じで、一匹が突っ込んでくる。それに合わせて右腕を振り上げる。その直後にゴブリンは姿を消した。

いや、姿を消したように見えただけで、ゴーレムの一撃で10mは吹っ飛んでいったのだ。

ゴブリンは体長1mほどしかないが、10mも飛ばされねばしばらくは動けない。

今度は残りの9匹で襲い掛かってくる。

ゴーレムも同時には相手にできな『らしく、ゴブリンの斧による攻撃を受けている。

だが、その刃がゴーレムの体に傷をつけることはできない。そうやって戦っている間にもどんどんゴブリンは吹き飛ばされて、倒れしていく。

最後の5匹になつたところで、ゴブリンが一匹俺の方に襲い掛かる。俺とゴブリンの距離が2mほどになつたところで目の前で小規模の落雷が起きる。

あまりの眩しさに一瞬目を閉じて、目を開けた時には目の前のゴブリンは全身に火傷でも負つたのか真っ黒の塊にまつてている。たぶん死んでいるのだろう、真っ黒になつた体にヒビが入り割れたのだった。

「ねえギン、俺一人でも十分戦えたんだけど……」

これは事実である。そのまま突っ込んで来てたら鍊金術で言えないが凄いことになっていた。

『そんなことはいいじゃねえか。とりあえず気持ち悪かつたから殺しただけだよ』

口調変わつてんじゃね?つて思つた人もいると思うが、その通りだ。俺が『僕』から『俺』に変えてからギンモノのような口調で話すようになったのだ。

可愛い子犬のくせに妙に生意氣な台詞を言つやがる。

『それにルイスがやると、さらに気持ち悪いことになる』
そう言いながらギンはゴーレムの方を見ている。

いつの間にか、最後の一匹になつていて、それを上から殴りつけて潰したのだった。

自分が出したゴーレムなのにかなり怖いですね、はい。

そして時刻も昼になつたので、魔の森にいる魔獸でも狩ることになった。

魔物は生まれながらにモンスターで人の害でしかないのだ。
魔獸は魔力の影響で巨大化して凶暴化した動物のことだ。

なので魔獸は食べると意外と美味しいのだ。

そう思つて探していると、田の前に鹿が元になつたであろう魔獸が出てきた。

体長は普通の鹿とそれほど大差ないが、全く違うのは角だ。
角の長さが2mは越えていて、横にも3mぐらいはあるので、攻撃を避ける時はけつこう苦労するのだ。

それにこの角は武器に加工もされるぐらいなので、当たるとかなり痛いと思つ。たぶん串刺しですね。

そんなことを考えている俺には全くかまわず魔獸が突進してくる。掌を合わせていつもの鍊金術の体制に入る。

そのまま空氣中に手を出すだけでもいいのだが、どこかに触れてないといと変なかんじなので、地面に掌を置く。

魔獸との距離は7mぐらいになつたといひで、魔獸が急に足を止める。

それも簡単なことで、俺が空氣中の水蒸氣を凍らせて、魔獸の足と地面を固定したのだ。

そして動けない魔物のといひまで行き、掌を合わせてから掌を魔獸の毛皮の上に乗せる。

一瞬光った直後には魔獸は死んでいた。

何が起きたのかと言つと、鍊金術の反応は

『分解反応』『構築反応』だ。

鍊金術にかなり慣れてきた今では、分解反応だけとか構築反応だけのみでも行えるのだ。

今回は分解反応のみを使い、血中の赤血球を全て破壊したのだ。赤血球を破壊されれば、全身に酸素が行き渡らなくなつて、窒息死させられるのだ。

近くにあつた木を練成して薪を作り、その場で焼いて食べることにした。

火はギンの雷で着けることができる。

焼きあがつた魔獸は一人で仲良く食べる。

そうは言つても俺は5歳の子供なのであまり食べないのだが……、ギンのやつがかなり食べる。

今はあまり大きくなつてないが、しばらくしたら俺よりも大きくなりそうで少し怖いです。

昼食も食べ終わり、夕食のおかずには魔獸でも倒して帰らうとしてたところに、大きな縁の巨人がやってくる。

「ねえギン」

驚いてギンの顔も見れない。視線は縁の巨人に釘付けだ。

『何だルイス』

ギンもこちらは見ていない。

「ゴブリンって大人になつたらあんな風になるの?」

いまだ視線は目の前の5mはある大きな縁の体に釘付けだ。そして
その赤い瞳と目があった。

（あつ俺…これから殺される）

そんなことを一瞬で思わせるほど殺氣立っていた。

『ああ

ギンが投げやりな態度だ。

でも、俺にも全く分からぬので仕方ない。

試しに構造を見る目で見てみる。

名前は……【オーケゴブリン】

わお、ゴブリンにはいくつか種類がいそうじゃねえかよ。

しかも何？何でこいつは斧じゃなくて無駄に長い2mはありそうな
長剣なんて持ってるの？

あれだとゲームでも勝てそうもないんですけど……。

そんなことを考えているとオーケゴブリンはここから走ってきた。

どうやらオーケゴブリンともHンカウントバトルやるみたいです。

7話 魔の森？（後書き）

やつと魔の森入れました。

入らせ方は多少強引ですが、許容範囲ついてことにしてください。

誤字・脱字・質問は感想欄までお願いします。

評価、感想、お気に入り登録お願いします。

「あーっ、死んだかな」

オークゴブリンを前にすると、たゞがに自信が無くなつてくれる。

『ルイス、ゴーレムー。』

ギンは焦つながらゴーレムを出すまいと叫んでくる。

「うん」

それだけ叫んで、いつものように練金術を行う。

掌を合わせ、地面に置く。

一瞬光った後に、目の前にゴーレムが2体現れる。

一度に出せるのも制御えるのも2体までなので、文字通り本気だ。

オークゴブリンは本体が体長5mはあるのに對し、二つとも2mほどのゴーレムが2体。

普通に戦つても勝てるか分からぬ。

2体のゴーレムで同時にオークゴブリンに襲いかかる。

思念操作を使って、一体は正面から殴りかかり、その隙にもう一体が背後から一発殴るはずだった。

そう、はずだつたのだ。

オークゴブリンの持つていた長剣が光を帯びて、ゴーレムに切りかかる。

そして、ゴブリンの斧では傷一つ付かなかつたゴーレムの右腕が地面に落ちた。

何が起きたのか理解できず、俺はただその光景を見てこることしか

できなかつた。

オークゴブリンはゴーレムの右腕を切り落とした後に、そのままゴーレムの胴体部に横一薙ぎ。胴体部が切れ落ちて、ゴーレムの一体が動かなくなつた。

ゴーレムの一體が倒されるまでが、僅か5秒ほど。その短い時間の内に、もう一體のゴーレムが一撃をいれるのには、あまりにも時間が短かつた。

何とか背後に回り込んでいたものの、オークゴブリンが振り返りながら横に一薙ぎ。

ゴーレムの胸あたりが真つ一つになり上半身が崩れ落ちる。どうやらゴーレムは2体とも倒されたらしい。

2体のゴーレムを倒したオークゴブリンが俺とギンの方へ走つてくれる。

距離は10mほど

(こける)

またいつものように練金術を行つ。

いつもと違うのは、掌を合わせた後に右の掌を広げて、左手首から1mほど空中を滑らせる。

右手の掌が通過した場所から氷の刃ができる。

1mほどの氷の刃が完成したところで、オークゴブリンは3mほどの距離にまで近づいてきている。

俺が長剣の間合にに入ったのを確認し、オークゴブリンが長剣を振

り上げ、俺の頭上に振り下ろす。

俺はオークゴブリンよりも早く氷の刃を振り上げ、自分の体の横に振り下ろす。

氷の刃が通った場所から水蒸気が一気に凍りつき、その氷の上を長剣が滑るように流れしていく。

大振りして隙だらけになつたオークゴブリンの腹に、氷の刃を横一閃。

氷の刃の切れ味がよかつたのか、オークゴブリンの右足が切れ落ちる。

5歳の身長で5mもあるオークゴブリンを横に切つたら、足しか切れなかつた。

右足を無くしバランスを崩したオークゴブリンは仰向けに倒れる。

倒れたオークゴブリンは、千切た右足の傷口から徐々に凍り始める。5秒もせずに完全に凍りついたオークゴブリンに

ドゴオン

小規模な落雷だがゴブリンに当たのよりも数倍は大きい落雷が落ちて、オークゴブリンの氷は崩れて粉々になる。

「死ぬかと思った」

緊張が切れて仰向けに倒れ込む。

オークゴブリンの姿を思い出すと、自分がどうしてあんなのに勝て

たのかが不思議になる。

それと、鍊金術の強さにビックリもある。

「ねえギン、鍊金術で火とか光つて出せると思つ?」
光はともかく火は出せると強そうだ。

『無理じゃね?』

全くこの狼のような犬のような靈獸は、と思つ。
全く可愛げがない。

「それとギンつて犬なの? 狼なの?」

これからどう考えればいいのか分からないので、一応聞いておく。

『僅かな差で狼の方が近い。雷獸だからあんまり関係ないけど』
雷獸と言つ言葉のところで自分に雷を纏わせる。
触つただけで感電しそうだ。

「そういえば、ギン、さつきのオーラゴブリンが持つてた長剣つて
魔法剣だよね?」

構造を見ればいいのだが、あまり考えずにギンに聞いてしまつ。

『うーん、たぶんそうじゃない? 光つてたし』

そう確かに光つてたのだ。たぶんこれで攻撃力を上げてゴーレムを
切り裂けたのだろう。

「この剣貰つていこつかか。ダンさんとの修行で剣術を教えてもら
つてるんだし、良い剣の方が嬉しいしね」

もつ言いながら地面に落ちている、2mほどの長剣を拾つ。
だが、上がらない。
重すぎて上がらないので。

5歳児の体力だと2mの長剣は持ち上げられないらしい。

「なり」

そう言って

さつきのように掌を合わせ鍊金術を始める。

合わせた掌を長剣に置く。一瞬光った後に長剣は1mほどの太刀が一本と60cmほどの脇差が一本に変わる。

柄の部分は空気中の元素と土中の元素から、もう一本と同じように作った。

ついでに鞘も作っておく。

太刀を背中に掛け、脇差は右の腰にかけておく。

「じゃあギン、熊の魔獸でも仕留めて帰ろつか

熊の魔獸を太刀で仕留めてみて分かつたが、魔力を流せば強度が増している感じがする。

おそらく発動具の役割を果たしているのかもしない。魔法剣と言うのは発動具に必要な魔法石を材料に含まれているので、魔力を流す時に発動させる魔法の属性の性質を刀に帶びさせれるのだ。

たとえば、炎の魔法を発動するように魔力を流せば、魔法剣は炎を帶びる。

俺の場合は魔法適正がないので剣の強化だけだが……。

試しに鍊金術で氷の刃を作るようにならせてみると、氷の刃と同じ性質を持ち、切ったところから凍りついた。ちなみに空中の水蒸気も凍らせる事ができる。鍊金術で作った氷は魔力で浮かせることができたので、オーケゴブリンとの戦いでしばらく氷が浮いたのはそのせいらしい。俺は保有魔力が多過ぎるので、魔力制御ができるな

いせいで、感情が高まると魔力が垂れ流しになるみたいだ。その量も俺にとつては大したことない量だが、氷を浮かせるほどなのでけつこうな量らしい。

魔法が使えないことがかなり悲しいことだと、ギンから説明を受け分かつた気がする。

「じゃあギン帰るよ」

帰りも来た時と同じように自転車で変える。

いつもと違うのは熊の魔獸の右腕を持って帰つてることだけだ。

熊は大きすぎて持てなかつたのだ。

熊は右手が高級食材だと聞いたことがあつたので、右手だけ凍らせて持つて変えることにしたのだ。

そのためだけに後ろにカゴまでつけた。

帰つた後は、初めて魔獸の肉を持ち帰つたことと、太刀と脇差を持って帰つて来たことで魔の森に行つていたことがバレて、少々めんどうなことがあつたのだった。

8話 魔の森？（後書き）

今回は学校の授業中にケータイのメモ帳に書いてたので、句読点とかがいつも以上におかしいですが、ご了承ください。

誤字・脱字・質問は感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録お願いします。

昨日はオーケゴブリンに無事勝利し、今日はダンさんとの地獄の剣術修行だ。

ちなみに今日は昨日手に入れた刀も持ってきている。2本とも持つてくると重すぎるので、太刀は置いてきて脇差だけだが。

「ダンさん、昨日魔の森に行ってでっかいゴブリンを倒して、これを拾つたんですけどどんなんものが分かりますか？」

そう言って脇差を渡してみるとダンさんの顔が少し驚いた表情をする。普段はほとんど無表情なだけに、こうして表情を出す時はけつこう重大な時が多いと、ここ最近の付き合いが分かつてきた。

「これは魔法剣だ。魔法石を碎いたものを製造過程で混ぜていて、魔力を流せばそれに応じた魔法を纏う剣だ。だが変だな、俺も冒険者をやつていたが、こんな形の剣を見たのは初めてだ」

どうやら驚きのほとんどは刀を見たことがなかつたかららしい。

「でかいゴブリンで魔の森に出るつて言つたらオーケゴブリンで間違いないと思うが……オーケゴブリンつて言つとBランクの冒険者が苦戦してやつと倒せるかもぐらいのレベルだぞ。それに倒した冒険者から奪つたのかもしけんが魔法剣も持つてたとなるとBランクの冒険者では勝てない。ルイスはどうやって倒したんだ？」

やはり、刀ではなくオーケゴブリンを倒したことに驚いていたらしい。

「簡単なことです。鍊金術で作った氷の刀で凍らせて、ギンの雷で砕きました」

簡単に言つた、とでも言いたげな表情をしているが、咄嗟に氷の刀を思いつかなければやられていただろ？

「それで、オークゴブリンは60cmぐらいのその剣で戦つてたのか？」

5mもあるオークゴブリンが60cmの刀で戦つてるのは何となく笑えてくるし、普通は戦いにくいだろう。

「いえ、最初は2mぐらいの長剣だつたんですけど、鍊金術で1mの刀と60cmの脇差にしました。一応は余った塊は「」にあるんです……」

そつ言つて背負つていたリュックから立方体にしておいた金属の塊を出す。

「」の大きさじゃ、もう一本刀を作るのは無理そうだな。何か作れそうなものでも作つときな」

ダンさんはめんどくさそうに俺に振つてくるが、何を作るのかは興味があるらしい。

「じゃあ……銃なんてどうでしょうか？」

けつこうナイスなアイデアだと思う。物語の主人公とかでも銃を使う人も多いし。

「銃つてなんだ？」

銃が分からぬのか、きょとんとした表情をしている。

「銃つて言つのはですね、こんな形をしている金属の塊で、」を引くと弾が飛び出して遠くにいる敵に攻撃を当てるんです」

ジェスチャーを用いっぱいに使って説明してみると、ダンさんは興味津々と言つ言葉がお似合いな表情をしている。今日は感情表現豊

かなオッサンである。

「じゃあルイス、今作ってくれ」

無茶な。と言いたいが言えそうな空氣じゃない。

て言つよりも「アレ?」これだけじゃ足りないんじゃね?

「ダンさん」

「なんだ? ルイス」

「材料が足りません」

「……」

「……」

「その脇差いらぬんじゃないか?」

しばしの沈黙の後にダンさんがそんなことを言つ出した。

「駄目に決まつてゐるじゃないですか。俺は一刀流に憧れてるんですから」

「ずいぶんと子供っぽい理由なのは自分でも分かつてゐる。見た目が5歳なんだ、見た目に似合はずではないはずだ。

「剣を一本使う冒険者はいなかつたと思うがな……」
ダンさんは考えるような表情をしている。

「魔法石つてどこで取れるんですか?」

「魔法石つてどこで取れるんですか?」
鍊金術があれば加工はできるので、魔法石が取れる場所さえ分かれ
ば……。

「どこで取れるとかはねえんだ。魔力の強い場所に数百年置いといたら自然と魔法石になつてゐる。小さすぎて使えないものなら、そちらへんの土を掘つたら出でてくるが、魔法石は加工できない。砕いたりはできるが固めることはできないし、小さい宝石と小さい魔法石じゃ見分けがつかないから普通は無理だ」

よつするに諦めろつてことらしい。

何も言わずにダンさんの家から出て、ダンさんの家の裏、つまり、いつも剣術の修行をしているところに行く。

そしていつものように鍊金術を発動させる。

一瞬光つた後に、地中に埋まっていた小さな宝石と魔法石が出てくる。ついでに、土中の金属も性質を考えて合金にした塊も作つておく。

俺の後ろでその光景を見ていたダンさんは言葉が出ないと言つた表情だ。

そして、魔法石と宝石が無造作に積み上げられた山を見て一つ一つの構造を見る。

魔法石は魔法石で一まとめにして。宝石は宝石で一まとめである。

最後に魔法石の塊と合金の塊、そして刀を作つた残りを練成して一つにする。

少しどつておいた合金を練成して腕輪を作る。その腕輪に取つておいた魔法石をはめて発動具を作つておく。

これで、人前でも鍊金術が使える。

魔法石と合金を練成した塊をもつ一度練成して、銃を2丁作る。

一丁は俺ので、もう一丁は欲しそうにしていたダンさんの分である。

「ダンさん、あげます」

口をパクパクさせた金魚みたいなオッサンになつたダンさんに拳銃形態の銃を差し出す。

それを受け取つたダンさんは、一度だけ引き金を引いてみるが何も出ない。

「やつぱりな、俺は魔力が無いからこりねえや」

そう言つて俺に返してくる。

「分かつたよ」

正直2丁拳銃もカツコイイのでよしとするか。
俺も引き金を引いてみると何も起こらない。

「あれつ？」

「魔力を弾にするんだろ？なら魔力こめなきや撃てないだろ
ダンさんに指摘され、今度は魔力を込めてみる。

銃口が一瞬光つて、発射音もせずに光の弾が撃ちだされる。
木を狙つて撃つたが、弾は木を抉り、木は倒れた。
想像以上の威力だった。

テンションが上がりすぎて頭がおかしくなつたのか、もう一つ作つてみたくなつた。

ほとんどの合金が残つてるので、それを使つてもう一つ銃を作つた。

だが、今回のはただの銃ではない。狙撃銃なのだ。スコープのレンズの部分も土中の水晶とかで作つたので、かなり本物に近いかんじになつたかもしれない。見たことがあるのがドラグノフだけなのでドラグノフを作る。ドラグノフにも種類はあるみたいだが、俺には

分からぬ。とりあえず作っしゃいましたよ。

威力を試したかつたが、ダンさんに止められた。

さすがに拳銃形態のアノ威力だったのだ。その数倍は大きさがあるから、威力も数倍と考えたのだろう。

その後はもう……地獄ですね。

ダンさんとの修行でボロボロになるまで鍛えられましたね。

帰った時に父様に拳銃が見つかって、興味津々だったのを貸してあげることにしたら、さっそく撃ちに行ってしまった。

ちなみに父様は火の属性が得意なので火の弾が撃ち出て、着弾点から火が噴きだしたのだった。

その後に「欲しい」と言われたので、仕方なく作つてあげたのだった。

母様がこれだとどっちが子供か分からないとでも言いたげな目線を送ってきたが、無視することにした。

9話 新武器（後書き）

はい、ほんまグダグダです。

かつてないぐらいにグダグダですよ今日は。

書きながら頭ん中で数回分からなくなりました。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願ひします。

評価、感想、お気に入り登録お願いします。

10話 開花（前書き）

4万PV、1万ユニークまでもう少し…！

たぶんこの話でいくはずです。

総合評価300突破

お気に入り登録数100突破

まだまだですが、これからもよろしくお願いします。

今日はダンさんとの修行はない日なので魔の森に来ている。母様に気づかれたら、また泣いて怒られるだろうが、まあいいだろう。父様は喜んでいたし。

前回の装備は何もなしで鍊金術だけだったが、今回は違う。魔獣の皮で作ったホルスターに2丁拳銃、万が一のために背中に脇差をかけている。

脇差なのに何故背中？と思つただろうが、5歳と言つ身長上の理由が大きい。腰には魔法銃があるので邪魔にしかならないのだ。

ちなみに魔法銃は両方とも魔力の弾を撃ちだすだけじゃ面白くないので、片方は改造して氷結弾にしてみた。

拳銃に練成陣掘り込んで、自動リロードまでしてくれる便利な銃になつたのだ。

それに着弾点から凍りつくと言つ能力付きなので、氷の魔法を使う魔法使いがいるのか分からないが、同等の力は持つていると考えてもいいだろう。全身は凍らないのが欠点とも言えるが、練成陣を彫つて効果が出るのか不安だったが、やってみると案外あつさりとできちゃつたりした。

ちなみに脇差の魔法剣にも同じ練成陣を彫つてある。

「ねえギン、今日のお昼は何食べたい？」

魔の森に魔物は現れるが、常に現れ続けているわけではない。むしろ、数時間に一体ぐらいにしか会ないので、魔物に会う確立は低

いと言つてもいいだろ？

なので、基本的には暇なのだ。

道も分からなくなる時はあるが、ギンが匂いで分かるから心配はない。

『鬼』

「ですよねー」

ギンは一回ハマると同じものをしばらく食べ続けるタイプの奴なのだ。

今回でもう何日目になるか分からぬが鬼の魔獸をほぼ毎回食べている。

そのうち絶滅するのでは…とさえ思えてくるぐらいに食べ続け svo

なので怖いもんだ。

「ギンひときあ、大きくなつたらビのくらゐの大きさになるの？」
これはけつこう重大な疑問だ。俺よりも大きくなるなら、かなり足の速いギンに乗れば移動の手間がなくなる。

『……たぶん、もののけのお姫様のお母さんの狼ぐらいかな？』
えつ、ちょっと待つてくださいよおー。

それつて、『もののけ姫』に出てくるモー一族の 口さんですよね？
ここ異世界ですよ？確かに、それぐらい大きくなつてくれたら乗れるし、かなり強そうだけど……何でそれ知ってるの？

『何で知ってるの？とでも言いたげな顔だな、ルイス』
クスクスと笑いながら、ギンが顔を見上げてくる。

「よく考へてることが分かつたね」
なるべく表情に驚きを出さずに、なるべくいつものように心がけて対応する。

『頭に直接語りかけてるからな、ルイスの考えとか記憶は軽く共有してるみたいに分かる。それにしてもルイスが元いた世界つておもしろそうだな』

話についていけない。とりあえず言えることは……靈獸さん凄すぎです。

なんかだんだんギンが凄い存在なんだって思えてきた……。

「ねえギン、大きくなつたら背中に乗せてよ」
ストレートに言つて先に約束させておこう。

『その時の気分次第』

この雷獸は空気が読めないみたいです。

突然目の前にオークゴブリンが3体も現れてしまった。
しかも驚くことに1対は2つみても子供だ。
その子供までもが好戦的でエンカウントバトルやらかしきそつな空気をガンガンに感じさせる。

「ねえギン、オーカゴブリンって家族でお出かけでもするのかな？」
親子3人でのお出かけ中に遭遇しちゃいましたつて感じしかしない。
これつて俺がやられるか、逃げるか、逃げさせるか、全滅させるしかしないと、残された遺族の方が可哀想だな。

『魔物も家族との関係を大切にするとか笑えてくる』
そう言いながらギンはすでに笑つていて、笑いすぎて苦しそうだ。
もう放つておいてもいいだろ？

「じゃあ、今回は皆殺し方向で、コノでも試させてもらおうかな」

そう言つて腰のホルスターから魔法銃を2丁抜いて2丁拳銃のスタイルをとる。

ちなみに右手が魔法銃で左手が氷結弾の練成銃だ。

オークゴブリンがこちらに走つてきながら、掌が光つたと思つと、その手には冒険者から奪つたのか槍と斧を持っている。

父親かと思われる大きいオークゴブリンは斧を持っていて、母親らしきのは槍、子供も斧を持っている。

おそらく換装系の魔法を使えるのだろう。

便宜上、父ゴブリン、母ゴブリン、子ゴブリンと呼ぶことにしよう。上位の固体の魔物は魔法を使えると父様の書斎にあつた本に書いてあつたが本当らしい。

そういうえば最初に戦つたオークゴブリンも魔法剣をちゃんと使つてたし。

距離が4mほどになつたところで、父ゴブリンが斧を振り上げた。その隙を逃さずに右足の甲に氷結弾で1発当てる。

威力はかなり低く抑えたので、痛いだろうが貫通はしていない。少し凍りついてはいるが。

初めて相手に銃撃を食らわせた余韻に浸つていると、左から母ゴブリンが槍での一撃をくらわせよつとしてくる。

父ゴブリンを攻撃した時に左手を突き出しているので、氷結弾での対応はできない。

思考するよりも早く、右手が左腕の下にあつた。

気づいた時にはすでに引き金を引き終えていて、魔法銃から光の弾が撃ちだされる。

威力を抑えることなど考えていなかつたので、母ゴブリンは跡形も

なく消え去った。

母ゴブリンの方を見ていて反応が遅れてしまつたが、父ゴブリンが田の前で斧を振り下ろそうとしていた。
最初の一撃のダメージはそれほど受けなかつたらしい。

「ギン」

避けられないし、対応もできない。街でやられる。やつ捕つた時に無意識にギンの名前を呼んでいた。

『何？ ルイス』

チラッとギンを見ると、ゴブリンと戦つていて、見た場面はゴブリンの首をギンが噛み切つた場面だつた。
どうやらギンは倒したみたいだが、俺はやられるみたいだ。

斧がすぐそこまで迫つてきていて、咄嗟に腕でガードする姿勢になる。

ガード姿勢ができた時に腕にあたる金属の感触。
それが腕を滑り落ちるような感覚。

「あれ？？」

今の俺は呆れるような声を出していくだらつ。
だが、それでも仕方がない。
確實に腕は斧に切り落とされ、そのまま頭まで割れていだらつ。
それなのに傷一つないのはおかしい。
斧が腕に触れる感覚はあつたのにだ。

何が起きたのか分からぬ。
だが、チャンスなのは変わりない。

氷結弾の威力を最大にして父ゴブリンの腹を貫通させる。着弾した瞬間から父ゴブリンの全身は凍りつく。貫通した弾が当たった地面は直径10mほどが完全に凍っていた。何とか勝てたらしい。

『ルイス、あのタイミングでよく避けられたね』ギンには避けたと思われるらしい。自分でもそう思いたいぐらいである。

「確かに斧が当たった感覚はあつたんだけどなあ思わず呟いてしまう。」

『ふーん、じゃあ、あの時にちょっとだけ感じた魔力の流れはルイスだつたんだ』

この靈獸は何か言い出しだが、よく意味が分からぬ。

「魔力の流れって……魔法銃で使つたんじゃなくて?」

『うん、あの時は魔法銃は使つてなかつたから、ルイスが魔法使つたんだと思うけど』

ギンはそう言つている。

そこで少し前にリア先生に言われた言葉を思い出す。

俺には先天性の魔法が眠つてゐる。

少しの魔力しか動いてないのも、先天性の魔法だと考えると納得できる。

命の危険を感じて本能がその力を開花させたのかもしれない。

この魔法はもしかしたら……物理攻撃を無効化させる先天性魔法

「ねえギン、たぶんこれって物理攻撃を無効化させる先天性魔法だと思つ」

一応は考えたことをギンには言つておく。

『じゃあルイスと喧嘩する時は魔法使って雷だけで攻撃する』
そんなことを言い出した。これからは喧嘩しないようにしよう。

今回のドロップアイテムの武器はショボそうだったので持つて帰らなかつた。

「じゃあギン、早いけど帰ろつか

そう言つて今日は疲れたので帰ることにした。

魔法銃の実践デビュ－した結果はなかなか使えるみたいだ。
それに先天性魔法にも目覚めたから、後は自由に使いこなせる訓練を積めばいい。

帰る時に魔獣の兎を狩つて帰つたら、母様に泣いて怒られたが、もう諦めてくれたらしい。

ちなみに兎はギンが全て食べてしましました。

10話 開花（後書き）

ちょっと武器を変更するために強引に持つていつてしましましたね。

分かってるけど氷結弾の方がカッコイイって思つてしまつたので…

…。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。

評価、感想、お気に入り登録お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6840x/>

転生したら鍊金術師

2011年10月31日19時51分発行